

【はじめに】

岐阜大学医学部附属病院 消化器外科の大熊祐輔と申します。

私は2024年に入局し、現在は専攻医として臨床業務に従事しております。この度、2025年11月にシンガポールで開催された *The 21st World Congress of Endoscopic Surgery* に参加する機会を頂きました。本学会は私にとって初めての国際学会参加であり、多くの刺激と学びを得る大変貴重な経験となりました。今回、その参加を通じて得られた印象や学術的知見、ならびに国際学会ならではの雰囲気について、体験記として報告いたします。

【学会について】

シンガポールは東南アジアの経済・交通の中心地として発展してきました。多文化社会が築いた独自の教育、医療、ビジネス環境が整備されています。国際会議や商談、観光など幅広い目的で世界中から人々が訪れています。

World Congress of Endoscopic Surgery は、内視鏡手術に関する最先端の知見が集まる国際学会です。

世界各国の外科医や研究者が集い、最新の研究成果や技術革新が共有され、国際的な交流と学術発展の場として位置づけられています。

今回、「Evaluation of the efficacy of the extraperitoneal approach in permanent colostomy construction at our Institution」という演題で発表しました。

直腸切断術における単孔式の永久人工肛門造設術は、開腹手術においては腹膜外経路(Extraperitoneal colostomy: EPC)が一般的に施行されることが多かったが、腹腔鏡下手術では手技的な繁雑さから腹腔内経路(transperitoneal colostomy: TPC)がより選択されることが多くなっています。一方で TPC に比べ EPC は、傍人工肛門ヘルニア、内ヘルニア、人工肛門の脱出などといった人工肛門に関連した合併症が少なかったと報告されており、我々の施設でも比較検討した結果、腹膜外経路の人工肛門造設は

有意にストーマに関連した合併症が少なく安全に施行可能であり、有用な手術手技であることが示唆されました。

会場では他診療科における内視鏡外科に関する発表や最新医療機器に触れられる企業ブースもありとても興味深い毎日でした。当然、会場での使用言語は英語でありその点も普段の学会とは違う雰囲気でした。



【終わりに】

今回の学会参加を通じ、多くの刺激を受けるとともに、自身の課題と今後の方向性を改めて考える機会となりました。

得られた学びを診療・研究に還元し、よりよい医療を提供できるよう努力してまいります。

また、国際的な視点を持ちながら、今後も積極的に挑戦を続けたいと考えています。

この貴重な機会を支えてくださった皆様に心から感謝申し上げます。

引き続き、研鑽を重ねてまいります。

